

あてると、流れる血はすべてその上にかたまりついた。犬飼は一角にたのまれた短刀をも取り出し、自分が庚申山で出あつた事柄を詳しく角太郎に語つたのである。角太郎は長い夢を見てゐた氣持ちがした。夢はさめたようだ。いやまだ覺めてゐないようでもある。角太郎もさすがに父の姿をした怪物に刃をあてることが出来ない。怪物は、二十四時間捨て、置けば元の姿になるといふから、それまで打つてかゝるのを待たうと思つてゐる。その時牙二郎は息を吹きかへして、手ばやく手裏劍を角太郎に投げる。巧みにそれを避けると一しよに、牙二郎がまた立ち上つて斬つてかゝつた。角太郎は、今度は見る間に下へたゝきつけた。

牙二郎が、一角の上へのしかゝつて倒れると、あたりには急に地響きがして、廣一角の姿は、何ものともしれぬ怪物の姿にかはる。目は鏡を並べたように光つて、口は血をしたたらすばかり赤く、深く耳まで裂けてゐる。牙を鳴らし、爪を張り、あたりをにらんでつく息は、この小さな庵を打ち砕くかと思ふほどである。まことにそれは、年を経た山猫で



あつた。

角太郎は抜いた刀の儘打ち込んで、腰のあたりへさつと刃を入れた。現八も油断せず、うしろへにひかへてゐる。すでに深く手を負うた山猫が、窓の格子をめりくと踏み破つて、そこから遁げ出さうとするところを、角太郎は刀を「やつ」と取り直し、咽喉のあたりを目がけて、鏢も通れと、幾度となく刺し貫いた。さすがに怪物も、部屋の中へ地響き立て、落ちて来て、息は絶えたようである。牙二郎もいつの間にか、山猫の姿に變つてゐた。

この騒ぎの間に船蟲は遁げてゐた。角太郎は、雛衣の側へ寄り、傷の手當てをして介抱した。けれども深く突いた重傷であるからどうしても助からず、角太郎が父の讐をかへしたことを喜びながら死んで行つた。

そこへ籠山がはひつて来た。彼は遁げた船蟲を捕へてゐた。角太郎が復讐をした喜びを述べなどしなから、木天蓼の刀を贗一角に奪はれた證人に、船蟲を越後へ伴つて行くから許して貰ひたいなどといつた。贗一角の門弟中には、ほかの獸などの化けてゐたものもあつたが、山猫の殺されたあとでは勢力がなくなり、今まで山猫におさへられてゐた山の神などに殺された。庚申山の怪物は、犬飼・犬村の働きによつて、最早残らず姿を消したのである。

角太郎は名を改めて、犬村大角禮儀と呼んだ。そして赤岩や返壁の家を疊んで人に譲り渡し、犬飼と一しよに他の犬士をさがしに廻ることゝなつた。籠山は、船蟲をつれて越後へかへる途中で、船蟲にだまされて遁げられ、長尾家へも歸れなくなつたので、また途中から遁げ出し、白井の城の管領定正に降参した。こゝでも彼は重く用ひられることゝなつた。

指月院に籠る人々

荒茅山で別れた犬田や犬飼が、至るところでかうした武勇な働きをしてゐる間に、外の犬士だちも別の場所でそれ／＼武勇の名を輝かしてゐたが、今一々その詳しい話を書いてゐるいとまがない。

犬塚信乃は信濃から越後へ行き、奥羽を廻つて、既に四年の年月を旅に送つた。年の暮れ近く甲斐の國を旅してゐて、富野穴山の麓を通り過ぎた。そこで彼は家來をつれた一人の武士に鐵砲で打たれた。幸ひに彈丸は身をそれたが、死んだふりをして倒れてゐると、武士らは近づいて来て、小鳥狩りに誤つて人を打つたことを驚きはしたものの、殺した上はその立派な兩刀を奪ひ取らうと手をかけたところを犬塚に投げ飛ばされた。武士はこの國の家臣泡雪奈四郎秋實といふものであつた。

そこへ猿石の村長をしてゐる四六木木工作といふ老人が出て来て、いろいろと仲裁をし、信乃の怒りをなだめた。信乃はそれから木工作のすゝめるまゝに、木工作の家へ行つて長く逗留することゝなつた。木工作に一人の娘があつて、濱路といつた。まことは濱路は木工作の子ではなく、二三歳のころ鷺にさらはれて来て、この山中の木にまたに挟まれ泣いてゐたのを、木工作が見つけてつれて歸り、これまで育て上げて来たのである。木工作は信乃を濱路の養子にし、信乃を奈四郎の手引きで領主にすゝめ、役人にして貰へば自分の家も幸福だと考へてゐる。けれども信乃はこれより後他の犬士を探さなければならぬ爲事があるから、こんなところで養子になどなり領主に仕へてゐるわけにいかない。どうして木工作に斷つてよいかに困つてゐるのだ。

木工作の妻は夏引といつたが、品行のよい女ではなく、奈四郎と相談して、夫の木工作をないものにしてしようと企んでゐた。石禾といふ村の里はづれに指月院といふ寺があつて、その住持は近頃かはり、新たに住持となつた僧は、大抵毎日修行に出て留守であつた。

小僧だけが留守居をしてゐるところへ、奈四郎と夏引とが出かけていつて、座敷を借り、その悪い相談をした。

ある日木工作は奈四郎に呼ばれて行き、歸らうとする時奈四郎に鳥銃で打ち殺された。さて夏引は、悪い下男にいひつけて、その死骸を自分の家の雪の中へ埋め、夫の木工作が歸らないといつて大騒ぎをし、その邊をさがして雪の中の死骸を見つけたようことにした。さてこの罪を信乃になすりつけるために、信乃を欺いて土藏の中へものを取りにはいつて貰ひ、外から錠をおろしてしまつた。その間に下男は鶏を殺し、その血を信乃の桐一文字の刀に塗つておいた。

木工作が信乃に殺されたといふ訴へが役所へ出た。間もなく立派な様子をした甘利兵衛堯元といふ役人が家來をつれて取り調べに来る。庭にかくしてあつた死骸が鐵砲きずなのもをかしければ、刀が今殺したばかりのような新しい血でぬられてゐるのもをかし。

「信乃が殺したとは定められない。しかし夏引の訴へもあることなれば、信乃は搦め取つて行く。また濱路も取り調べの必要あれば、伴つて行くぞ」

堯元はさういつて、信乃、濱路を捕へて立ち去つた。そのすぐあとでまた同じ名の甘利兵衛堯元といふ役人が來た。自分の前に同じ名で來た人は誰であるか。とにかく木工作の殺された様子を取り調べて見れば、信乃が殺したことはまこと、は思はれない。それよりも信乃と濱路とを伴つて行つた人を取り調べて見なければならぬ。堯元はさう考へて歸つて行つた。

信乃と濱路とが伴はれていつたのは、指月院であつた。堯元と名をいつたものは、犬山道節忠興であつたのだ。

「や、貴僧でござつたか」

出て來た住持は外でもない、大法師である。猿崎十一郎照文も出て來た。こゝへは犬川も落ち合つてゐたが、犬川だけは今他の犬士を探しに出かけてゐる。犬山らは、留守居を

した小僧の言葉によつて、犬塚が危い策略にかゝつてゐることを知つたのだ。

まことの役人の甘利堯元は、人をつかひきびしく捜させて、指月院に信乃をはじめ幾人かの武士の住むことを知つた。なほよく調べて見れば、信乃には罪がなく、指月院にあつまるものは、いづれも立派な武士たちである。堯元はかへつてそれに敬服して、この武士たちを主君の武田信昌にすゝめようと思つた。信昌は心の正しい、立派な領主である。ある日堯元を伴つて指月院をたづね、犬山、犬塚らに對面したが、犬山らは、武田家に仕へようとはしなかつた。

信乃と、もに指月院へ救はれて來た濱路の素生を聞いた時に、大法師は驚いた。里見義成の第五女は濱路姫と呼ばれたが、幼少の時鷲にさらはれその行く方が知れなかつた。今この濱路が幼少の時着てゐたといふ着物に、里見家の篠龍膽の紋のあつたといふことは、その第五女であることの立派な證據である。法師らはこの濱路姫を主君のもとへ送らなければならなかつた。犬山と犬塚とがそれをまもつて行くことになつた。

相模小僧の勇戦

犬田小文吾悌順は、隅田川で別れた犬坂毛野をさがすために諸國を廻つて、越後の小千谷といふところに泊つてゐた。旅館の主人は石龜屋次團次といつて土地での若人頭をしてゐる。昔は相撲を取つたから、犬田の大力なのを褒めて、幾日も宿に泊めておいた。

この北國では鬪牛といふことをやる。磯九郎といふ男が、その鬪牛の歸るさに、雪の中に出來てゐる窖の中へ落されて斬り殺され、金を奪はれたが、その強盜は酒頭二とその妻の船蟲とであつた。籠山逸東太をだまして、越後への道中で遁げてしまつた船蟲は、今はこの地で強盜の妻になつてゐるのだ。

犬田はその後眼病になつた。いろ／＼と手をつくすが三宅島で潮風に吹かれた目の病は容易によくならず、物さへ見えなくなつてゐる。強盜の妻の船蟲は、鬪牛の日に犬田を見

つけた。そして犬田が石龜屋へ泊つてをり、近頃目をわるくしてをることをまで搜り出した。彼女はさきに犬田のためにひどいめにあはされてゐる。この犬田の眼病の間に、なんとかして復讐をしようと考へて、女の盲按摩になり、石龜屋へはひつていつた。犬田が女に肩をもんで貰はうとすると、女はうしろへ廻つて懐剣を取り出し、一つきに犬田を刺さうとした。犬田は危く身をさけた。そしてたやすく船蟲を押へつけ、次團次らに引き渡した。

次團次らはこの女を山の中の庚申堂へ引っぱつていつて、梁の上からつるし下げた。かうして三日苦しめた後に、なほ死ななければ首を打つことが、この地方の習慣になつてゐた。三日めの夜である。この庚申堂の縁へ腰をおろして、疲れを休めようとした武士がある。それは甲斐の指月院を立つて、犬士を捜しながら旅をつづけて来た額藏の犬川莊助義任である。犬川は、女が堂内につるされてゐるのをあはれに思つた。船蟲が何かと訴へるのをまこと、思ひ、女をおろして繩を解き、女の家へ送つて行つた。酒頭二らの賊の家で

は、酒盛りを開いてゐた。犬川は船蟲にすゝめられ、その家で泊ることゝなつた。

犬川が別室で寝てゐる間に、酒頭二らの賊はわるい相談をしてゐた。まづ邪魔になる犬川を襲ひ、次に犬田の泊つてゐる石龜屋を襲撃しようといふのである。犬川はその話を漏れ聞いてすぐに身拵へをして立ち退き、石龜屋へ先廻りして待つてゐた。犬川を襲ひ、既にもぬけの殻になつてゐるのを見出した酒頭二らは、石龜屋の外へ押しかけて、ふい打ちをした。石龜屋ではうろたへたが、そこには身拵をした犬川が待つてゐたのである。賊は見る間に斬り伏せられた。そこへ靈玉の力で眼病のなほつた犬田も出て来て、敵をたふした。次團次らは追撃して賊の家を襲ひ、酒頭二を殺し、その他の賊を或は殺し或は捕へた。船蟲はまた例によつて遁げてしまつた。

石龜屋が犬川、犬田の手柄を訴へると、兩人は領主長尾景春の母籠の刀自の館から迎へられて、御馳走を受ける代りに却つて捕へられ牢へ入れられてしまつた。籠の刀自に二人

の娘があつて、一人は武藏の大塚殿へ嫁ぎ、もう一人は石濱の千葉殿へ嫁いでゐた。犬川の額藏は大塚で役人を殺して遁げた人であるし、犬田は石濱で犬坂と共に馬加大記を斬つて遁げた人であるから、犬川、犬田がこの長尾家で捕へられるのは尤ものことであつた。兩人は牢から引き出されて首を打たれ、首は大塚殿と千葉殿から來てゐる人に渡された。大塚殿からの使ひは、力二、尺八に打たれた丁田町之進の弟、丁田畔五郎豊實であるし、千葉殿からの使ひは馬加大記の親戚にあたる馬加蠅六郎郷武であつた。この二人の使ひに、長尾家の使ひの萩野井三郎がついて、大塚と石濱とへ送つて行つた。首は瓶に入れて酒で漬けてあつた。その一行が出ていつてしまふと、長尾家の老臣、稻戸津衛由光の邸から潜かに送り出された二人の武士があつた。それがまことの犬川、犬田であつた。稻戸は二人の勇士を殺すことを惜んだ。そして牢へはひそかにさきの賊の二人を入れて殺したのだ。丁田、馬加らが持つて歸つた首は、その賊の首であつた。犬田の刀はさきに大塚で鍛上社平の刀を取つて來たものであるし、犬川の刀はかつて千葉家で栗飯原が殺さ

れた時に、名笛と、もに男女の賊に持ちにげされた小篠、落ち葉の二口の銘刀であつたから、いづれも捕へられた時に奪ひ取られた。犬川の刀は、まことは自分の家に傳はる刀であつたのだが、父が切腹した後千葉家に買はれ、男女の賊が持ちにげしたのを犬田が買ひ取り、犬川に贈つたのである。稻戸は氣の毒がつて、二人に別のよい刀を贈つた。

犬田と犬川とは、大塚殿、千葉殿の使ひを追つてそのあとを旅していつた。丁田と馬加とは、長尾家の臣萩野井がとかく邪魔になつてならない。今日も二人は朝くらいうちに起き出て、萩野井よりはすつとさきを歩いてゐた。こゝは下諏訪であるから、諏訪湖が見えてよい景色だ。

「どうだ、こゝで小篠、落ち葉の銘刀といふを抜いて、斬れ味をためして見ようではないか」

床几に腰をかけ湖を眺めながら茶をすゝつてゐた馬加が丁田にさういふ。そばにはちよ

うどつれて来た家來たちの姿も多く見えない。ぬいて試すならば、今であつた。

湖の土手には乞食の小屋があつて、そのまはりに多くの乞食が腰をおろし、馬加らを眺めてゐた。馬加の家來がその乞食の一人をひっぱつて来ると、馬加はあづかつて来た銘刀をすらりと抜いて乞食の首を打ち落した。まことにそれは、驚くべき銘刀であつた。外の乞食らは、それを見ると一齊に蜘蛛の子を散らすように遁げ失せたが、たゞ一人若い乞食が別段におそれた様子もなく、なほ椎の木の下から眺めてゐる。相模小僧と呼ばれた乞食であつた。

馬加の家來が主人の抜いてゐる刀の側へ立ち寄つて紙を出し血を拭うてゐると、つかつかと出て来た相模小僧は、その家來の首筋をつかんで二三間投げ飛ばし、馬加の右の手をしつかりと押へつけた。

「落ち葉、小篠の銘刀を持つものは何ものであるか。さきのはなしに馬加と呼んでゐたは、馬加大記常武の身内のものであらう。その刀をわたせ」

「無禮者下れ。汝は何ものだ」

「乞食に姿は變へてゐるが、親の髻をさがす、犬坂毛野胤智である」

「さては舞ひ子に姿をかへて、わが一族を打ち果した犬坂は汝であるか。よい土産だ、血祭りを受けよ」

馬加、丁田の家來どもは、犬坂一人を追つ取り巻いて打つてかゝるが、この勇士に立ち向へるはずもない。見る間に馬加の首が打ち落される。丁田は傷をうけて遁げていつた。馬加の家來も打ちたふされた。犬坂はにっこりと笑ひ、小篠、落ち葉を手に取り上げて、悠々とそこを立ち去らうとする。その時、

「曲者待て、小篠、落ち葉を渡して行け」

「いや渡されぬ。汝は馬加の親族とも見えぬに、何故あつてこの身の妨害をするか」

「その刀に用事があるのだ。渡せ」

足早にうしろに立ちよつて、ちつと犬坂をにらんだ一人の武士があつた。筋骨たくまし

く見るからにその張りつめた力に氣おされそうだ。

「はっ」と下つて二人は斬り結んだ。いづれにもすきがない。

しばらくはそのまゝにらんでゐたが、ぱつと打ち合つて刀が交又すると、鏢元で押してゐて、互に刀を引くすきがない。

そこへまたうしろから一人の大男がかけつけた。

「やあ、珍らしい。犬坂氏、貴君をさがしていまゝで旅をしてゐたぞ。犬川氏も刀を引か
れい。犬川氏、かねて貴君に話した犬坂氏だ」

刀を斬り結んでゐたものは、犬坂と犬川の二勇士であつたのだ。引き分けようとあせる
ものは、いふまでもなく犬田小文吾である。犬坂も犬川も刀のさきに一心になつてゐるか
ら、犬田の呼ぶ聲などは耳へはひらない。犬田も、刀を引かせる工夫がない。一方を引か
せる、まつしぐらに、他方の刀が打ち込まれるのだ。と、見れば土手に「諏訪領」とかい
た高い石柱が建つてゐる。大力の犬田はやすくとそれを引き抜いて来て、二人の斬り結



んである刀の上に、歴へ石のようにして載せかけた。刀を石にしかれても、握り持った刀の柄を放さずきつと見返したのが、一しよであつた。

犬田は改めて犬坂と犬川とを引き合せて。

「もう一人の丁田は遁げ失せたが」

といふと、犬田は、

「いやその丁田は来る途中の土手でこの犬田がたゞ一打ちに打つて来た。持つてゐた刀も取りかへして来た」

といつた。犬田も犬坂も犬士の一人ではないかと玉のことをたづねて見るに、果して犬坂は「智」の字の刻まれた玉を持つてゐた。犬坂の母がまだ足柄に住んでゐた時、ある日の夕方、流星のような一つの光り物が南の方から飛んで来て、母の懐にはひつたと思ふと、それがこの玉であつたといふ。牡丹の花に似た黒痣もあつた。

犬坂はこの夜また犬田、犬川と別れた。彼は父の讐籠山逸東太を打たなければならなかつたからだ。籠山はその後管領定正に仕へてゐたが、犬坂はそれを打ち取つて復讐の目的を果たした。これはずっと後のことであつた。その同じ時に犬山道節は定正をねらひ、復讐の目的は果たせなかつたが、その兜を射落し、定正の軍を大いに破つて幾分か瘤飲を下げた。この戦ひの時に八犬士の中、仁を除いた七人がことごとく寄り合つた。

七犬士たちは、結城へ集まつて里見季基の五十回法養を営み、そこの古戦場へ大きな石の塔婆を立てた。その時には、大法師が法養のすべてのことをして、安房の里見家からは蛸崎照文が領主の代理になつて来て焼香をした。

大樟樹の空洞

里見家の居城に程近い館山の城主に、墓田權頭素藤といふものがあつた。

この人の素性を洗つて見ると、その父は近江の膽吹山で盜賊の頭をし、數多くの悪事を
はたらいてゐた男である。京都の祇園の祭りの時に父親は捕へられたが、それを聞くと子
の素藤は山へ打つ手が向けられない間に、山の有り金すべてをひとりで持ち遁げして、東
國の方へ下つて來た。どこへいつてもこれといつて面白いことはなかつたが、廻り廻つて
館山の近くの普善村といふところを通り、荒れ果てた諏訪の社で一夜を明かした時に、彼
はその社前の大樟樹と厄病神とが話をしてゐるのを聞いた。厄病神の話すところでは、こ
の頃近傍の村に病氣をはやらせてゐるが、これをなほすには大樟樹の上にある大空洞の水
の中へ黄金を一晝夜漬けて置いてその水を飲ませるとよいのだが、このあたりの村は貧乏

で誰一人黄金を持つてゐないから、はやく病をなほすわけにいくまいといふのだ。

それを聞いた素藤は、夜の明けるのを待つて大樟樹の上へのぼり、空洞を見つけて厄病
神のいつて置いたようにした。病氣をなほして貰ふために社へお祈りに來た人だちをつか
まへてその水を分けてやると、病氣の人だちは立ちどころになほつた。素藤は、村の貧乏
なのを知つてゐるから、黄金もそのまゝやつて人々を喜ばせた。かようにして素藤は、一
時に近傍の村から尊敬せられ、人々の頼みでその諏訪神社の神主になつた。百姓たちは素
藤から貰つた金子を返すし、神主としていろ／＼のお禮をもするので、素藤はあたりの人
だちから尊敬もせられ、金もたくさん貯へるようになった。

館山の領主は小鞠谷主馬助如滿といふ人であるが、素藤がこんなふうにしてその土地の
人達の人望を得ることを恐れた。そこで幸彌太遠親といふ家來に命じ、兵を率ゐて素藤を
搦めとることにしたが、遠親はかねて素藤から五十兩の金を借りたことがあるので、素藤を
氣の毒に思ひ、村長へ手紙を送つて、「自分が攻めて行く時には、いづこへか遁げのびてを

るように」といつてやつた。しかし遠親が行つた時には、素藤は遁げてをらず、村民百名ばかりと一しよに丁寧^{ていねい}に迎へて座敷へ案内をした。素藤は遠親にすゝめて、主君の領主を殺せば自分らは遠親を領主に押さう」といふのである。遠親はそれに賛成した。

さて遠親は、素藤を縛つて館山へかへつた。領主の前へ引いて出て、領主の如満へ事柄を報告するよな様子をして近づいて行き、ふいに腰刀を抜いて如満の首を打ち落した。素藤は縛られた繩を手ばやく取り外して、一しよに來た百姓から刀を受け取り、その邊にゐる家來だちを斬り立て、百姓だちも鎌や短刀を取り出してそのあとにつづいた。遠親が素藤の側へ近づいて來ると、素藤はすばやく遠親の首をも打ち落した。百姓だちは、元より素藤を押し立てゝゐる。城中の人々は残らず素藤に降参して、これから素藤は館山の領主になつた。

一たん領主になつた素藤は、自分のたくらんでゐた目的を達したものであるから、その後は亂暴な政治をした。昔膽吹山にゐた盜賊などを呼び寄せて、贅澤な暮らしをし、酒盛りば

かり開いてゐた。それでも近傍の城主だちとは上手に交つて、里見家へも丁寧な使ひを送り、里見家の家來となる代り館山の城主であることを許して貰ふように願つたのである。

里見家では老臣だちが集まつて相談をしたが、素藤といふ人間は感心出來ないけれど、すでに館山の城を取つてゐるのにそれと戦争をするまでのこともあるまいと思ひ、素藤の願ひを許して、素藤が館山の城主であることをそのまゝに見遁がすことゝした。素藤はますますよい氣になつて、氣儘なことをするよなになつた。

ある日素藤が城の高殿へのぼつて、城下の様子をあちこちと見渡してゐると、たくさんの人達が走つて行つて誰かを迎へるよな様子である。素藤は不審に思ひ近習に問ふと、

「あれは近頃世に名高い八百比丘尼を迎へるのでせう」といふ。素藤はなほも不審に思つて、その八百比丘尼といふものゝことを聞くと、八百比丘尼は、年の頃四十ぐらゐにしか見えないが、まことは八百餘歳になつてゐるから、世の

人八百比丘尼と呼ぶのだといふ。この尼に物を祈り願へばすぐにその願ひが聞かれるし、また死んだ人に逢はうと願へば、尼はその人の姿を煙りの中へ現してくれるさうである。そのために、近來八百比丘尼を迎へる人々がやかましく騒いでゐるのだ。素藤はその話を聞いて、自分もその比丘尼を一度呼んで見ようと思つた。素藤は自分に仕へてゐた若い女が近ごろ病氣で死んだので、その女の姿を現して貰はうと思つたのだ。

八百比丘尼は家來に案内せられ、素藤の前へ出た。まことに近習のいつた如く、老婆の尼とは見えず、まだ美しい若尼である。名を妙椿といつた。妙椿は夜まで待つといつて晝寝をしたが、夕方になつてもなかく目を覺まさない。やつと起されて素藤の部屋へはひり何やらお香のようなものをたくと、その煙りの中に見知らぬ美しい女が見えて來た。

「この女は誰であるか」

と問へば、妙椿は、

「この女は里見公の第五の姫君濱路姫でござりますが、君にはなにゆる里見公に申し上げ

て、この姫君をお貰ひ遊ばしませぬか」

と答へた。

素藤は、城主にはなつたし里見家と縁組が出来ればこれに越したことはないと思つた。

妙椿は、そのためには秘法をもつていくらでも助力をするといふことである。そこで素藤もその氣になつて、おもな家來たちと相談をし、ある日里見へ使ひを送つてそのことを願つて見た。里見義成は、使ひの人の用事を聞くと立ちどころにその願ひを斷つた。「里見家は清和源氏、大新田の流れで立派な家柄であるが、墓田の家はどういふ家柄かさっぱりわからない。それに濱路より上の四人の娘もまだ縁づいてゐないから、濱路だけを早く縁づけることは出来ない」といふのである。

使ひが歸つてそのことを素藤に告げると、素藤はまた妙椿と相談をした。妙椿はうまい策略を考へて、素藤に教へる。その後素藤のところからまた里見家へ使ひが立てられた。殿臺の近傍の八幡、宇佐八幡、諏訪の三社が長く荒れてゐたのを、素藤が百姓達にやかま

しく命令して、近頃それを立派に修繕した。三社は素藤の領地内にあり、もとは源氏の氏神である。ついでには今回修繕の出来た三社へ國主御自身の參詣を仰ぎたいと、使ひの人が口上をのべた。

義成は、もちろん素藤のしたことをほめてくれた。そして、次ぎの年の正月には嫡男の太郎義通が鎧の初着の祝ひをするから、そのすぐあとで素藤の修繕した三社へ、國主の代理で參詣に行かうといふことである。素藤は、事がうまく運んだのを大いに喜んだ。八百比丘尼は秘術を出して素藤を助けるといふことである。素藤が、義通を人質に取つてしまはうとする策略は、うまくやり果せるに相違ない。

素藤は諏訪の社頭にある大樟樹の空洞の中へ、兵卒を隠して置かうといふのである。ところが妙椿の秘術によつて、一夜のうちに、その空洞より城の中へ通じるとんねるが出来てゐた。このとんねるから兵卒を送り義通を捕虜にしようと思へば、それはわけのないことだ。文明十五年一月十三日のことである。まだやつと鎧着の祝ひの済んだばかりの若い

義通は、多くの家來をつれて、城を立つた。堀内藏人眞行、杉倉武者助直元を主なる家來として、三百人ばかりの兵卒を率ゐてゐる。

一行がよほど先方まで進んだ時に、うしろから君の使ひが早馬で飛んで來た。「堀内眞行の妻は急に亡くなつたから、參詣の人に加はることが出来ない。また杉倉直元の妻は難産であつて死んだ子を生んだから、これまた參詣に加はつてならない。それらの人の親戚家來も同様である。今より列を離れ、城へ歸られよ」といふ命令である。人々は不審の思ひをしたが、さうあればやはり參詣の同伴は出來ない。眞行、直元は、あとが氣にかゝるけれどもやむを得ず、残つた人々の中のしつかりした武士たちに、くれぐれも頼んで歸つて行つた。最も強い兵卒の五六十人が減つてしまつた。

一月十五日、義通はいよいよ三社へ參詣することになつた。義通について來た人々の頭小森篤宗、浦安乗勝は、「この館山の城主はまだやつと身方についたばかりであり、どうい

ふ策略があるかも知れないから」と危ぶんで、前日三社の様子を調べさせ、大樟樹のあることを知つて、その下に兵卒などを立て、置いたが、兵卒は戦などがあるとは考へないから、自然に心を油断させてゐた。義通が通ると、その途中には何百人かの百姓が、この晴れた日に簗笠などを着、行列を拜みに出てゐたが、これは素藤の兵卒でもであつた。社へ近づくに随つて義通について来た兵卒どもは途中に立つて途を警戒し、いよく社へ近づいた時には、その近習のものだけとなる。義通は神主に案内せられて、まづ八幡、宇佐八幡に参詣し、お神樂などをあげて、おしまひに諏訪社へ参詣しようと、社の前で乗り物を下り、近習に守られながら静かに石を敷いた道を歩いて行くと、樟樹の陰から一時に數百挺の鐵砲が撃ち出された。

「それつ、曲者」

といふうちに、小森と浦安とは、彈丸にあたつてたふれてしまつた。近習や兵卒どもが何れも刀を抜いて、若君の義通の周りを取り巻けば、樟樹の空洞かうは、「わーっ」と鬨の聲

があがつて、彈丸や矢が飛んで来る。そのあとから數百人の軍勢が押し出して来た。この空洞の中から、どうしてこんな數の軍勢が出て来るのかわからない。里見の軍勢の一人に十人二十人があつて、見る間に里見勢は突き伏せられる。義通はたゞ一人になつて刀を揮ひ敵の一人二人を斬りかけたが、ふいに横から襲つた敵將は、義通の利腕を押へてしまつた。今年十一歳の義通が、どうしてそれに手向へよう。敵將は、義通を小脇にかゝへて樟樹の空洞の中へはひつてしまつた。それは城主の素藤である。

里見勢はほとんど残りなく戦死をした。日頃はよく戦ふ里見勢も、この小勢をもつてこの大軍の飛び道具に取り囲まれては、戦ひの工夫がなかつたのだ。素藤の軍は城へかへつて凱歌をあげた。すると不思議なことには、樟樹へ通じてゐた隧道が、いつの間にかなくなつてゐた。すべては八百比丘尼の助力であつたのだ。しかるに尙また不思議なことにはこの戦ひが終り、諏訪の社頭は一面に里見勢の戦死者で埋められてゐる時に、空から黒雲が一つおとりて来たと思ふと、今まで晴れてゐた空が一面に曇り、風が吹き雨が襲うて、社

頭かぶの木きをたふし、石いしを飛ばした。しばらくはあたりも見えない激しい暴あれ方かたである。いつかまた、さつとその暴風雨あらしの去まつたあとには、里見勢さとみぜいの戦死者せんししやの死骸しがいは一つも残のこつてゐなかつた。

途中ちゆうちゆうで引き返かへした貞行さだゆき、直元なほもとが、大いそぎで城しろへ歸かへつて見ると、城しろにゐたものは二人ふたりがなせ歸かへつて來たかを怪あやしんだ。君きみの使つかひといふものも知しつてゐるものがない。

「さては計略けいりやくに乗のつたか」と氣きづいた時には、おそかつた。これはきつと若君わかきみの上うへに變かはつたことがあつたに相違さういないと、義成よしなりをはじめ城しろの人々ひとぐは心配しんぱいをした。その時空ときぞらに急きゆうに一つひとつの黒雲くろくもが舞まひ下りて、あたり一面いちめん激あしい暴風あらしとなり、しばらくは何なにもかもが見みえなくなつたと思おもふと、この城しろの東門ひがしもんのうちに、義通よしみちについて行いつた士卒しそつの二百人ひひやくにんばかりが何いづれも重おも傷でをおうて落おち重かさなつてゐた。それぐに手當てあてを加くはへ療治りやうぢをすると、この中なかの百人ひやくにんあまりは生き返かへつた。いづれも夢ゆめを見たような氣持きもちちである。この人達ひとたちのいふところにより、義通よしみちが館山たてやまの城しろへ捕虜とりこにせられたことは最早もはや疑うたがへなくなつた。けれども今いままで諏訪すはの社頭しゃとう

にたふれてゐたものが、どうしてかく城じやうちゆう中ちゆうへ送おくり歸かへされたのであらうか。それは夢ゆめのよように思おもへて、わけがわからない。城じやうちゆう中ちゆうの人々ひとぐは、これこそは伏姫ふせひめの靈れいが身方みかたを助たすけてくれたものでないかと考かんがへたのである。

伏姫に養はれた神童

里見家ではこの頃老公の義實は瀧田の城にゐるし、義成は稲村の城にゐた。稲村の城では、直ちに素藤を攻める相談をして、その月の二十一日には、三千餘騎の軍勢が館山へ向け繰り出された。堀内貞行と杉倉直元とは、この間の失敗を取りかへすために、一人は先陣となり、もう一人は後陣にひかへた。義成は自分で中軍を率ゐてゐる。いよく館山の城へ到着して、まはり一面に取り囲み、たゞ一押しと攻め寄せた。

城中でもかねて覺悟をしてゐたことであるから、城門を固く守つて應戦した。城を仰ぐと高い城樓の上には、捕虜にせられた義通が嚴重に柱に縛られてゐて、その側には刀を抜いたものが立つてゐる。なほ城樓の上に五六人の士卒が現れたと思ふと、その中の一人が大聲をあげて、「今回義通を捕虜にしたのは、決して謀反を企てたのではない。素藤はさき

に義成公の第五の君を迎へようと願つたが、その願ひは聞かれなかつた。今その君を下し賜るものならば、若君をも鄭重にお返し申す。もしもこの願ひが聞かれず、あくまでも城を攻めるといふならば、若君を害し奉るより外はない」といつて引き下がる。これを見

ては、義成の軍勢も思ひのまゝに攻め立てることも出来ない。義成はひとまづ軍を纏めて退却するような様子を示した。素藤は得意になつて城門を開き里見勢を追撃して來ると、急に前後から挟み撃ちにして、城兵はさんぐに打ち破られ素藤も危く打たれさうになつて引き上げた。身方はかくして勝利を占めたが、さて急に攻め寄せれば、義通のいのちを奪はれることであるから、しばらくは戦ひをやめ、城を遠巻きにして陣を布いた。

瀧田の義實老公は、この報告を聞いて頭を悩ました。かように人質を取られた戦ひは、あたり前の爲方では勝つことが出来ない。このたび諏訪の社頭で戦死した士卒どもが、風雨

に取り巻かれて城中へ送りかへされたことは、伏姫の靈の助けによることであらうから、やはりなほも伏姫の靈に祈り願ふより外はあるまい。さう考へて老公は、ある日潜かに富山の大山寺へ参詣せられた。伏姫が亡くなつてから、もう二十年の年月が過ぎ去つてゐる。今日は谷川の水も少なく、伏姫の墓へも通へるといふことなので、老公はその墓へも参拜して歸らうと思つた。

お伴について來た蟹崎照文も、大山寺に残し置かれた。隨ふものは、僅に二人の近習である。義實には、二十年前の悲しい思ひ出が、たゞ昨日今日の出來事のように目に浮んで來る。墓のあたりの木々だけが伸びた。義實はしばらく目をつむつて墓の前に立つてゐると、側にゐた近習の一人が「あつ」と叫んで打つ倒れた。つゞいてもう一人の近習もばたりと倒れる。どこよりか強い矢が飛んで來たのだ。

左右の木の間から四五人の曲者が飛び出して、槍の穂を揃へ、義實の身を取り巻いた。義實も刀を抜いて敵に立ち向つたが、次第にうしろへ追ひつめられて、すでに危く見えて

ゐると、木の陰にまた聲がした。

「曲者、無禮をするな。八犬士の隨一犬江親兵衛仁こゝにあるぞ」

天地に響く大音聲である。身の丈は三尺四五寸、顔の色は薄紅で桃の花の如く、肌は白く肉は肥え、樵のような着物を着て、六尺ばかりの棒を持ち、腰に一口の短刀をさしてゐる。襲ひかゝる槍を物ともせず、忽ち敵をたゞき伏せて、右左に投げ飛ばした。さて用意の藤蔓を出して、松の木に縛り上げる。初めから恐れてよくも打ちかゝり得ない一人の曲者だけが遁げていつた。仁は息一つ常と變らず、棒をさめて義實の前に平伏した。

「汝はさきに神隠しにあつたと聞いたが、いづこにあつて育つてゐたか。よくも余を救つてくれたぞ」

義實がその手柄を褒めると、仁はその後の出來事を語つた。その話によれば、仁の上に下りて來た黒雲が仁の體を大空へ舞ひ上げたと思ふと、間もなく仁は、この伏姫の墓近くに置かれてゐたのだ。そして仁をわが子のごとくに養育し、學問劍術の道をも教へてく

れた。仁はまた九歳にしかならないが、年の頃十五歳位に見え、いかにも神女に養はれた神童とうなづかれる。

そこへまた一人の老人夫婦と、なほ外に二人の女が現れた。老人は、さきに遁げた一人の曲者を捕へてゐた。これは姨雪與四郎、音音の夫婦と曳手、單節の二人の嫁である。この人達も伏姫に救はれ、荒芽山から黒雲に巻かれて、この富山の奥へ送られてゐたのだ。神童の養育を助けて來たものは、この姨雪一家であつた。富山の奥にさうして六年の年月がたつてゐた。

義實は親兵衛仁をはじめ、與四郎の一家を伴れて、城へかへつた。素藤を征伐に行くには、この神童にまさつたものはあるまい。仁は、「軍勢などはいらない。たゞ與四郎一人をつれて素藤の城へ乗り込まう」といふのである。仁は馬に乗つて、館山の城へ立ち向つた。與四郎がその馬の口を取つてゐる。



城門の前へ立つた仁は里見の使節であるといふので、素藤は仁を引き入れ対面することになった。仁は何ものをも怖れず悠々と廊下を通つて行くに、城内の兵卒ども、その威風に怖れ手が出ない。仁は素藤の坐つてゐる大廣間へはひり、素藤を尻目に向け、眞直に床の間へ進んで鎧櫃の上に腰をおろし、一座をにらみつけたので、素藤は、「これは氣狂ひであらう。者どもこの氣狂ひをひきずり出せ」と下知をすると、兵卒どもは一齊に仁に襲ひかゝつた。その時仁の胸からは、光りのようなものが輝き出て、人々はその光りに打ちすくめられ、思はず前に平伏する。つゞいて躍りかゝつた素藤の首筋をつかみ、足の下に敷いて動かさない。

素藤がかように仁に捕へられれば、城兵は一人として仁に手向ふことが出来ない。仁は城兵にいひつけて若君の義通を伴はせる。館山城は、またゞ間に仁の手に奪はれてしまつた。

捕虜となつて稻村の城へ送られた素藤は、仁のなさけ深い取り扱ひにより殺されるところを助かつて國外へ追放せられた。仁はその手柄により、館山の城主にせられた。さすがの謀反も、これでひとまづ平げられたのだ。

素藤は山や澤のようなところをあてどもなく歩いて行くと、そこには妙椿の庵室があつた。妙椿が、術を使つて素藤を呼び寄せたのである。二人はまたそこでわるい策略をはじめた。素藤についてゐたわらゐる家來たちも、妙椿の術でこゝへ呼びあつめられた。館山の城の武器藏にあつた弓矢鐵砲も、妙椿が術を使うと、こゝへ降つて來た。濱路姫は病氣になり、親兵衛仁がその部屋の夜番に呼び寄せられてゐたが、義成はいろゝのことで仁を疑つて、仁に「しばらく諸國を廻つて來るようにな」といひつけた。仁が旅へ出てしまふと、妙椿はすべて自分の術がうまくいつたので、素藤の軍勢と共に館山の城へ攻めよせ難なく城を取りかへした。

里見勢の館山攻撃は前のように始められたが、このたびは妙椿が術を使つて暴風を起す

ので、里見勢はまたも館山の城を攻めあぐんでゐた。義成も今は後悔して、仁を寄びよせる使ひを出さなければならなかつた。仁は旅にゐて早くも館山城の奪はれたことを知り、僅の軍勢を率ゐて館山城へ乗り込んだ。妙椿の術も仁の靈玉にはかなはない。

素藤が、仁に掴み上げられ二階より下へ投げ落されたところへ、人々が寄つて来てその首をはねた。妙椿は、仁に向ふと忽ちその靈玉の光りに射すくめられ、二階から下へ飛びおりたが、大きな石の手水鉢の中へ落ちて死んでゐる姿を、あとで里見勢が見つけて取り上げると、それは年のたつた牝狸であつた。

白川山の虎退治

八犬士はめでたく里見家へあつまつて来た。何れも無雙の勇士である。

八犬士がかように一人もれなく集まつて来たには、大法師の手柄が少なくない。また、大法師の手柄を思ふにつけては、安房の國に里見の家を興すまっばじめに大きな手柄を立てた金椀八郎孝吉の名を思ひ出さなければならぬ。そこで八犬士のすべてに金椀といふ姓をあたへ、孝吉の手柄を後の世までも傳へようと考へたが、かように新らしく姓をつくつて與へるには、まづ朝廷のお許しを受けなければならぬ。そこで八犬士の中の一人と蛭崎照文とを使ひにして都へのぼらせ、その時の執權細川政元にお願ひして、このお許しを乞はうとした。この大事の使ひには、まだ少年の大江親兵衛仁が選ばれた。仁が正使、照文が副使である。

仁と照文とは、百人足らずの家來を従へ、船に乗つて都へのぼる。朝廷や足利將軍、その外あちこちへ獻上するお金や品物も一ぱいに船に積んだ。船は東海道にそつて西に向ひ、伊豆から遠州灘をわたつて三河の苛子崎まで來た。老人の姨雪與四郎は、元來はこの家來の中に加へられなかつたのだが、仁が心配になるのでひそかに船の中へ忍び込んで、一行に加はつて來てゐた。

時は七月の末であつた。海の荒れが長く續き、船を進めるわけにいかないので、苛子崎のがげに錨をおろし、海のなぎを待つてゐる。朝夕は涼しくなつても、晝の暑さはまださすがにきびしく、船の人々もこの長逗留に退屈になつてゐた。こゝは伊勢、志摩の商船が東の方へ行く時必ず碇泊する港であるから、陸へあがれば氣をまぎらす店などもたくさん出來てゐるのだが、仁は大事の役目を持つ身として、家來だちに上陸することを許さない。港には仁の船の外に、なほ一艘の船が竝んで碇泊してゐた。

その港の船着き場へ、四五人の家來を従へた役人風の男が現れた。これは近頃このあたりに海賊の船が往復し人々をなやましてゐるといふので、碇泊の船をしらべに來た役人である。役人は小舟に乗つて、まづとなりに碇泊する船へこぎつけ、船内の取り調べたが、別段に不審のこともなかつたと見え、次ぎには仁の船へ小舟をつけ、船内取り調べにあがつて來た。役人のようすは横柄で、仁が少年であることを輕蔑してゐるように見える。いろいろと取り調べをして、なかく立ち去るようすがない。

仁はこの役人のようすが癪に障つた。むつとした顔で役人に向ひ、

「貴君は拙者を少年であると思ひ、無理難題を申されると見える。里見の家の名の聞えた八犬士の一人犬江新兵衛仁の手竝の程をごらんに入れよう。この上とも難題を申されるならば、そのまゝでは捨ておき申さぬぞ」

といつて、前にあつた大錨をたやすく引き寄せ、兩手でやつと振り上げると、さすがの役人もこの劍幕には驚いた。

「いや拙者はたゞ船取り調べの役人でござるゆゑ、これほど嚴重に取り調べをしなければ、

我が君に申し譯のない次第、然らば何人かお使ひの一人が拙者と一にしよわが君の城まで参られ、詳しく君に申し開きをして戴くわけには参るまいかと、役人の態度もおとなしくなつて来た。

仁は正使であつて一時も船を離れることが出来ない。副使の照文が数名の家來を従へ、この役人と一しよに城へ向つた。

港は夕方になつた。初秋の夕日は横から刺すように照りつけて、船の中は特別に暑苦しい。家來たちは仁があまりにきびしいのを、少し怨むような氣持ちになつてゐる。その時またどこからか一艘の小舟が漕いで来た。

「御存じの下戸酒屋上五郎でござる。眠氣さましの辛酒甘酒はどうでござるかな。さかなには章魚の脚、蛤もある。さあ〜召されい、召されい」と聲をかけた。仁の家來たちは大喜びで、すぐに酒賣り船を呼ぼうとすると、仁が大きな目を開いて、家來たちを叱りとめた。こんな知らない土地で、めつたに酒賣りなどの酒を

飲んでほならないといふのだ。

酒賣り船では、酒を買つてくれそうにないから、隣の船へいつてまた同じように聲をかける。こゝでは船乗りどもが、競争で出て来て、おれにも一椀、又一椀と、辛酒やら甘酒やらを思ひのまゝに買ひ、船の上で酒盛りをはじめた。酒賣りは、仁の船へ酒の賣れなかつた腹いせに、悪口をいつてその船の人と一しよに騒いでゐるし、なほ更こちらへ見せびらかすように船乗りたちは面白く遊んでゐる。

仁の船では、たまらなくなつた。家來たちは仁に願ひ、やつとのことで少しだけ酒を買ふことを許された。酒賣りが運んで来た甘酒を家來が茶碗に入れ仁のところへ持つて来たから、仁が茶碗を手に取りうとすると、不思議にも懐にあつた「仁」の字の玉が護り袋から脱け出て、仁の手を打ち、茶碗は下へ落ちて碎けた。

「さてはこの酒が怪しい。油断はならぬぞ」と仁が氣の附いた時には、酒を飲んだ家來たちは中にはひつてゐた毒にあてられ、目をみ

はり、涎を流して、うん／＼うなつてゐた。

仁も今は爲方がなく、ともかくも海賊が手を出すまでは自分も毒にあてられたふうをしてゐようと、そのまゝたふれた様子をしてゐると、隣りの船では呼び子の笛が鳴り、俄に錨があげられて、こちらの船へ漕ぎ寄せるつもりらしい。里見の船が都へ大金を持つて行くことを聞き、途中に待ち伏せをしてゐた海賊の船であつたのだ。海賊どもは手早くこちらの船にあがり、あちこちから目ぼしいものを探し出してゐる。仁は、「いまはよからう」と、がばと身を起し、大音聲をあげ、

「里見に名の聞えたこの仁を知らぬか。今こそ天罰を思ひ知らせてくれよう」と、小盗賊どもを片っぱしから投げとばした。

そのひまにこの海賊の大將と見えるものが、船底から金箱を持ち出し、小盗賊どもが仁と戦つてゐる間に、すばしこく小舟へ飛び乗つて、はや船から三間ばかり漕ぎ出した。それに気づいた仁は、小盗賊を蹴飛ばして船の舳先へかけて行き、「やっ」と聲をかけると、義

經のような早業、身は盗賊の小舟に飛びうつてゐる。小舟の上では海賊の大將と仁との組み打ちがはじまつた。

この海賊は海龍王修羅五郎といひ、西の國では並ぶものゝないといふ強い賊である。今純友查勘太といふ賊と一しよになり、四國九州邊をなやましてゐたが、近頃はその地の城主などが一しよになり海賊を防ぐことを嚴重にしたから、しばらくこの東海の港に船をかくしてゐたのである。修羅五郎は思つたにまさつた大力の賊である。さすがの仁もこれを一つかみに取りおさへることが出来ない。互に「えい、えい」聲を出して、組み打ちをしてゐる間に、小舟のことであるから、よこへぐつと傾いて、二人の體は引き組んだまゝ海の中へ落ち込んだ。修羅五郎は海賊だけに、海も陸も區別はない。仁は山育ちであつて、海にはなれない。たゞ「仁」の字の玉があるから、身は海の底へ沈まないだけのことだ。

仁のいのちはあぶなくなつた。
話かはつてこちらは城へ向つた照文であるが、役人と一しよに三十町ばかりも行くと、

役人は道に迷つたといつて、だん／＼山道のわからぬところへ踏み込んで行く。その時先方の木立ちから五六十人ばかりの盜賊が、立派に武装をして現れ出た。この賊の大將は、いふまでもなく今純友查勘太である。照文は、今は賊にあざむかれたことを知り、この賊に向ひ切り込んで、思ひのまゝに薙ぎたふした。その時また木立ちの中から二三百人の軍兵が現れて、この賊どもを取り圍んだが、これはまことの城兵が、海賊を捕へるために出て来てゐたのだ。

照文と一しよに来てゐた姨雪與四郎は、船に残つた仁の身が心配になつたので、あとのことを照文にまかせ、自分だけは大きいそぎで港へ引き返して来た。船の方を見ると、浪にもまれながら引つ組んでゐる二人の中の一人は、まぎれもない主人の仁である。與四郎は、さすがに水練には達してゐる。すぐに身を躍らせて海へ飛び込み、仁らのそばへ近づくと、短刀を抜いて修羅五郎の腹へ突き立てた。海賊の首は難なくはねられ、仁は小舟の中へ救ひ上げられた。この争ひの間に金箱は海の底へ落ち、仁が里見の老侯から賜つた腰刀も、

どこへ沈んだか見えなくなつてゐる。それを聞いた與四郎は、またも海の中へ飛び込んだが、しばらくあつて浮びあがり、小舟へがらつと金箱を投げ上げた。腰刀も安全に拾ひ上げた。そこへ照文の一行も歸つて来たので、互の無事を祝し合ひ、船へ戻つて『仁』の字の玉を取り出し、毒にあてられてゐる家來達の體をなでると、みな酒を吐いてもとの身にかへつた。この災難に與四郎のゐあはせたのは、仁の運の強いところであつた。

仁の一行は、都へついた。里見家よりの願ひの筋は聞き届けられた。しかし執權の細川政元は、智勇に秀いでた仁を見て、東國へかへすことを惜しく思つたから、お許しの書面は副使の照文に持たせて國へ歸し、仁だけを自分の邸の中にとめておいて、いつまでたつても國へ歸ることを許さない。仁の身が心配になる老人の與四郎、照文が特別に残しておいた若者直塚紀二六、その他幾人かの家來だけは、仁に別れ旅籠屋などに泊つてゐて、仁が政元に許されるのを待つてゐる。

かうしてゐる間も、政元の悪い家來たちは、相談をして仁と武藝競べをしようとする。ある日政元その外の役人のゐならふ面前で、仁は幾人かの勇者と試合を命せられた。第一番には、身の丈五尺八九寸はある鞍馬海傳眞賢との試合、眞賢は、赤檜の木太刀を持つて向つて來たが、仁は鍔扇であしらひ眞賢を疲らせておいて、よい加減の時に木太刀を打ち落し足で蹴倒した。第二番は無敵齋經緯、六尺ばかりの白檜の棒をりゆうくと振り廻し仁の前へ出て來て身構へたと思ふと、

「大江氏しばらく待ち給へ。拙者俄に持病が起きて手足がしびれる。残り惜くは思ふが、勝負はこの次ぎの時にいたさう」といひ、がらりと棒を捨て、びっこをひいて引き下がる。

第三番は澄月香車介直道、槍つかひの名人であるが、礮投げの名人紀内鬼平五景紀の助けを借りて試合に出る。澄月と仁とは、馬上に槍を合せた。澄月は仁にさんぐくに突きなやまされ、馬上にも危くなつてゐる時、紀内が小石を手に取り、ぱつと仁に投げると、仁は澄月に槍をからませながらさつと身を避ける。小石は澄月の額にあたり、澄月はたま

らず馬から落ちた。紀内が第二の小石を投げようとするところへ、すばやく懐の小石を手に取つた仁がぱつと投げると、これも額を打たれて馬から落ちた。第四番には、秋篠將曹廣當の弓、種子島中太正告の鐵砲、仁の弓で空を行く雁を打ち落とす競争だ。地上へ落ちた三羽の雁を見るに、仁の射た雁だけは羽根を矢で縫はれ、一滴の血もついてゐない。これも仁の勝ちときまつた。

第五番目は悪僧の徳用、堅削の二人との試合だ。まづ徳用が立ち向つて來る。徳用は八十二斤の杖を取り、仁は鐵棒を取つて馬上に争つたが、仁ははや徳用の杖を打ち落とし、徳用をひつつかんで頭上に高くさし上げた。そばに見てゐた堅削は、友達の難儀をすくふため棒を持つて立ちかゝらうとすると、徳用の乗つてゐた荒馬が駈けて來て堅削をふみ倒した。仁は上の命令で、徳用を地に投げもせず、地上へおろす。勝負は立派についたのである。これを見た人々は、仁のあつばれな武勇に舌を巻いて驚いた。

その頃都に、竹林異風といふ畫家があつた。この畫家はさきに丹波の田舎にある藥師如

來の前に住んで、寺へあげる虎の畫の額をかき暮らしを立て、ゐたが、人殺しをした、め村にゐられなくなり、都へにげて来て畫家になつてゐたのだ。ある日將軍家へ金岡の叫たと傳へられて來た虎の掛け物を御覽に入りたいといふので、そのことを政元に願ひ出た。見ればその虎の圖には、眼に睛をかき入れてない。政元は巽風を呼び出し、巽風にこの睛をかき入れることをいひつけた。

金岡のかいた本物の畫の虎は、眼に睛を入れ、ば虎が抜け出るといはれてゐる。巽風は、政元のいひつけに當惑した。眼に睛をかき入れて、虎が抜け出さなければ、掛け物は贋の畫だ。けれども虎が抜け出て來ても、大へんのことである。しかしいひつけはどうにもならないので、巽風は政元の前で大膽にも虎の畫の眼に睛をかき入れた。

すると不思議にもどこからかさつと疾風が吹いて來て、掛けてある虎の畫が上に吹き上げられたと思ふと、そこには額白く斑毛の大虎が一匹つと立つてゐて、前にゐる巽風の咽喉へかみついた。これは歴史にもかゝれてゐない出來事だ。巽風の首をかみきつた虎

は、どこともなく外へ歩き出したが、それを見る人々は驚いて、

「虎だ、虎だ」

と叫びながら、遁げまどうた。都の中は大騒ぎになつた。政元のいひつけで強い家來たちが大勢の兵士をつれて虎を捕へに出かけたけれど、日頃悪い家來たちは、虎に噛み殺されたり、同志打ちをしたり、さんぐのめにあつた。政元も、いまは虎退治に困りはてゐる。

仁はよいをりであると思つて、虎退治を政元に願ひ出た。もしも自分ひとりで虎退治が出來たなら、自分を東國へかへして貰ひたいといふのである。政元もいまは致し方なく仁の願ひを許したから、仁は喜び勇み、馬に打ち跨つて邸を出た。行く先は虎のすむといふ噂の白川山である。手には弓と矢二本を持つてゐる。與四郎や紀二六は、これもあとから追っかけて來た。

月の冴えた冬の夜であつた。仁は白川の山をあちこち探して廻ると、まがふところのな

い大虎が、牙をならし爪をみがいて仁の前に立ち現れた。仁は少しも驚かない。一本の矢を取りふつと射ると、矢は見事に虎の左の目を射、あまつた鏃はうしろの赤松の幹へ突き立つた。それを振り抜かうと虎のもがくところへ仁の射た第二の矢が飛んで来て、今度は右の目を射、虎は二本の矢で赤松の幹へ射とめられてしまつた。馬からおりて来た仁が、拳をかため虎の眉間を打つと、虎はそのまゝ息たえたようである。仁は虎を射とめたしるしに、その片耳をきり取り、それを持つてすぐに都の東の關所へ向つた。

關所の人に證據として見せるため、仁がこの片耳を取り出さうとすると、どこで紛失したか見當らない。しばらく關所の人達と争つてゐるところへ、急いでかけつけて来たのは仁の家來や政元の一行である。政元がこの虎を退治した場所へ来て調べてみると、目のない虎はいつの間にか、政元の家來の持つて来た掛け物の晝の中へ歸つてゐたのだ。仁の切り取つた片耳も、切られたきすがついたゞけで、そのまゝ晝の中へ歸つてゐた。

里見家の八犬士

犬江親兵衛が歸つて来たので、里見家にはまためでたく八犬士が揃つた。この勇士がゐる間は、里見家はどこの軍勢と戦つても恐れることがない。關東の諸領主たちは、里見のこの威勢をにくんで、同盟軍をつくり、陸から海から攻めて来たが、いづれも八犬士の率ゐる軍に攻め破られ、ほうほうの態で引き上げねばならなかつた。

その時京都からは使ひが下つて、義成親子の位の進められることが達せられた。この使ひの骨折りで、里見は關東の同盟軍と仲直りをした。里見は諸國へ攻め込んで領地をひろげようとは考へてゐない。その後里見の領地は富み榮えて、國內誰一人喜ばぬものがない。八犬士には、義成公の八人の姫君がそれ／＼妻としてめあはされ、なほそれ／＼に城を一つづつ送られた。

一訂正

・ 庫 文 童 兒 本 日 ・

昭和五年九月十三日印刷
昭和五年九月十六日發行

八 犬 傳 物 語

〔非 賣 品〕



譯 著 者 土 田 杏 村
 編 輯 兼 發 行 者 東 京 市 神 田 區 今 川 小 路 二 ノ 一 北 原 鐵 雄
 印 刷 者 東 京 市 小 石 川 區 久 堅 町 一 〇 八 君 島 潔
 印 刷 所 東 京 市 小 石 川 區 久 堅 町 一 〇 八 共 同 印 刷 株 式 會 社

發 行 所 東 京 市 神 田 區 今 川 小 路 二 ノ 一

ア ル ス 電 話 九 段 三 七 五 三 七 六 番

子 金 ・ 本 製

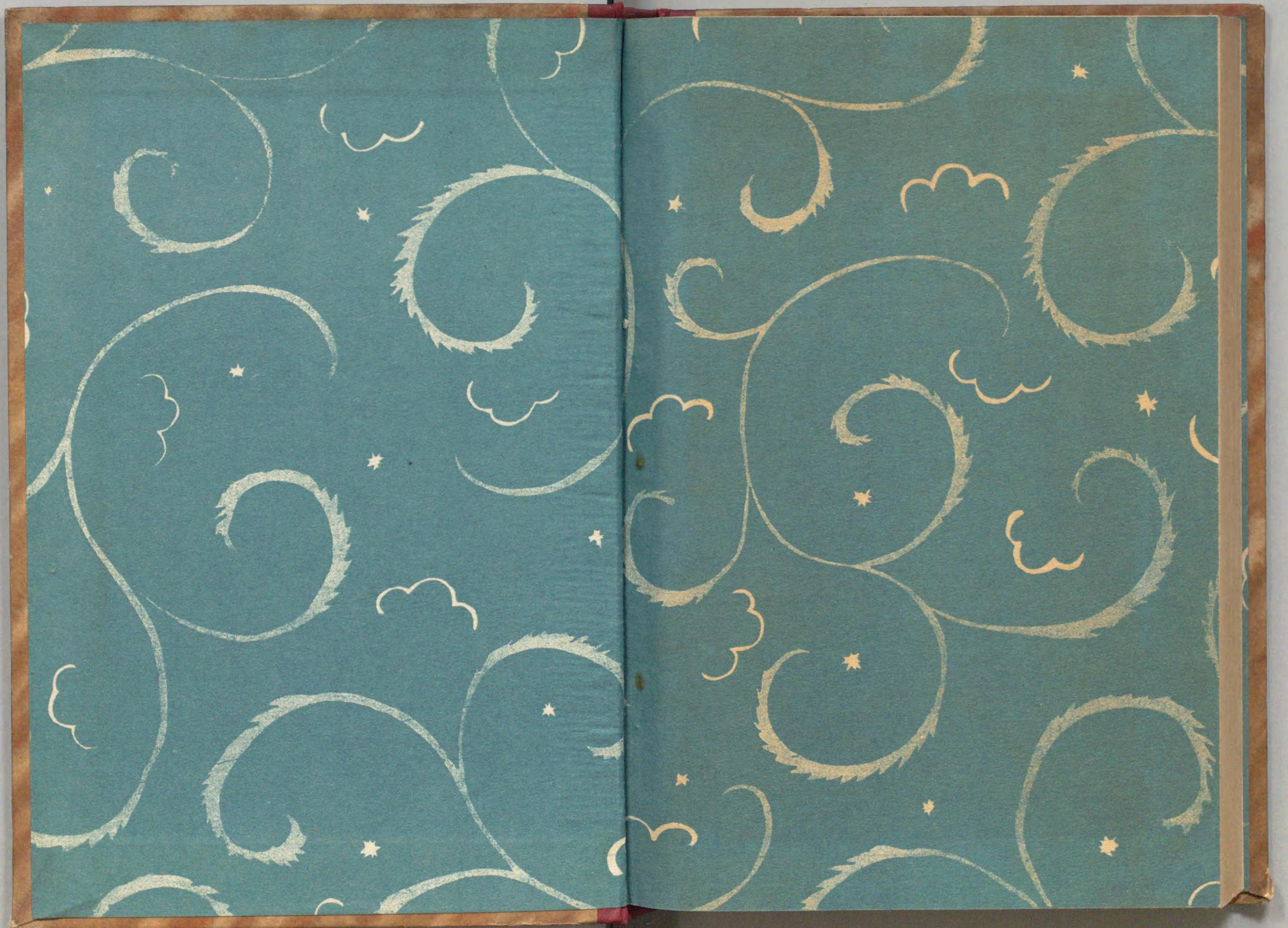
八犬士は子供を生み、その子供が大きく生長して自分たちは老人となつた時に、その子供達にあとを譲つて富山に入り、庵を結んで住んでゐた。ほんとうの仙人のような暮らしであつた。その後庵室を訪うた時には、仙人のような八犬士はいづこへ立ち去つたものか、その姿は山に見えなかつた。

(をばり)

五

日本經濟文庫		
<p>東京 日本經濟文庫 發行所</p>		<p>昭和 五月 十日</p>
<p>東京 日本經濟文庫 發行所</p>	<p>東京 日本經濟文庫 發行所</p>	<p>東京 日本經濟文庫 發行所</p>

日本經濟文庫



児乙部全集-N-73



1200600485537

